

(成果情報名) ほ乳期の混合飼育がほ乳子豚に与える影響

[要約] 隣接した2つの分娩豚房の隔柵を生後2日以内に取り除き混合で飼育した時のほ乳子豚の発育、生存性は、通常の単房飼育で飼育したものと差が認められない。

(実施機関・部名) 農業技術センター畜産技術所

連絡先 046-238-4056

#### [背景・ねらい]

離乳後の群の再編成時の子豚のストレスを軽減するため、隣接した分娩豚房の隔柵を取り除いた飼育システムにおいて、ほ乳子豚の発育、行動等を比較し、養豚における家畜福祉に配慮した飼養方法を検証する。

#### [成果の内容・特徴]

##### 1 試験区の概要

供試豚はランドレース種(8腹71頭)を用い、試験期間は分娩～5週齢(4週齢で離乳)までとした。試験区は生後2日以内に隣接する2群の隔壁を除去し、対照区は1腹毎に飼育している。

##### 2 発育調査の結果

終了時体重は対照区が重いが有意な差は認められない。また1日平均増体重はほ乳中、離乳後ともに対照区が大きい有意な差は認められない(表1)。

飼料摂取量は試験区でミルクの摂取量が少ない傾向がみられ( $P=0.087$ )、飼料要求率も同様にミルクで効率が良い傾向がみられる( $P=0.055$ )。

試験期間中に治療を行った個体はなく、また、死亡個体は試験区1頭と対照区2頭みられたが有意な差は認められない。事故の原因は生後3日以内の圧死だった。

試験区で乳付き順位の再構築が見られる。1反復目に2頭(片方のみ)2反復目に4頭(各腹2頭ずつ)見られ、試験区は2区とも隔壁の除去後、1～2日目に乳付き順位が固定している。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 本試験は中間成績であり、24年度も引き続き調査を行い、解析可能な反復数の確保と行動調査の集計を行う。

#### [具体的データ]

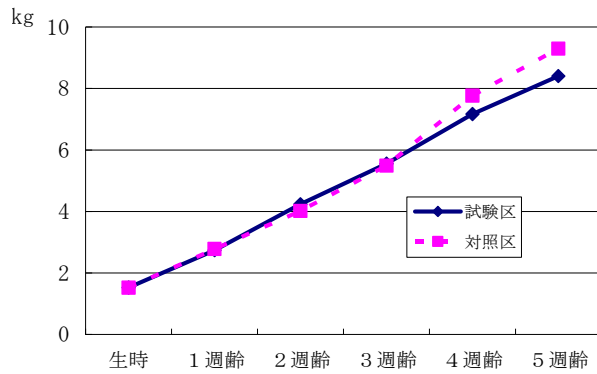


図1 発育の推移（平均値）

表1 発育調査結果

群	試験区		対照区	
	4	4	4	4
頭数	37		34	
開始体重(生時)	(kg)	1.5 ± 0.1	1.5 ± 0.3	
離乳時体重(4週)	(kg)	7.2 ± 1.3	7.8 ± 1.5	
終了体重(5週)	(kg)	8.4 ± 0.6	9.3 ± 0.7	
一日平均増体重				
全期間	(kg/日)	237.1 ± 18.0	251.7 ± 30.1	
ほ乳中(0~4週)	(kg/日)	256.3 ± 55.9	273.6 ± 67.4	
離乳後(4~5週)	(kg/日)	176.7 ± 107.3	179.6 ± 96.2	
飼料摂取量				
母豚	(kg/日)	4.6 ± 0.6	4.6 ± 0.1	
ミルク	(kg/日)	35.6 ± 32.2	78.0 ± 26.4	P=0.087
ほ乳期飼料	(kg/日)	323.5 ± 190.8	358.1 ± 95.1	
飼料要求率				
ミルク		0.13 ± 0.1	0.29 ± 0.1	P=0.055
ほ乳期飼料		0.43 ± 0.2	0.46 ± 0.1	
治療個体の割合				
治療頭数	(頭)	0.0	0.0	
のべ頭数	(頭)	0.0	0.0	
治療実施率	(%)	0.0	0.0	
生存個体の割合				
開始頭数	(頭)	9.5 ± 2.4	9.0 ± 2.2	
終了頭数	(頭)	9.3 ± 2.8	8.5 ± 2.1	
死亡個体数		1頭 / 37頭	2頭 / 34頭	
生存率	(%)	96.4 ± 7.1	94.7 ± 6.1	

平均値±標準偏差

[資料名] 平成 23 年度試験研究成績書

[研究課題名] 福祉的要素を取り入れたほ乳・離乳子豚の飼養管理方法の検討  
ア ほ乳期の混合飼育がほ乳子豚に与える影響

[研究期間] 平成 20 年度～

[研究者担当名] 西田浩司、山本 禎  
(共同研究：麻布大学)